

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：64401

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23401048

研究課題名(和文) 宗教と移民のアイデンティティ・共生：南アジア系ディアスポラを事例として

研究課題名(英文) Religion, Migration, and Identity: The Case of the South Asian Diaspora Population

研究代表者

辻 輝之(TSUJI, TERUYUKI)

国立民族学博物館・民族社会研究部・外来研究員

研究者番号：20546832

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、トリニダッド・トバゴ(以下、トリニダッド)および南フロリダの南アジア系移民及びディアスポラが、どのように宗教「伝統」を再構築しているか、またその再構築された宗教が彼らの社会関係資本形成にどのような影響を及ぼしているかを参与観察と聞き取り、古文書調査を通して、通時的・教示的に明らかにすることができた。トリニダッドでは19世紀から続くヒンドゥー教徒とカトリック教徒による同一マリア像の共有信仰について、先行研究では見落とされてきた複雑な集団間関係を明らかにした。また南フロリダでの調査は、北米における南アジア系移民と宗教に関する既存の研究に批判的な比較事例を提供した。

研究成果の概要(英文)：This research has addressed how the South Asian immigrants and diasporas have reconstructed their religious "traditions" and how the realigned religious faith and practices have affected their social capital development, drawing on ethnographic fieldwork and archival research in Trinidad and South Florida. This study has revealed intricate political and pragmatic relationships between differently-identified religious groups over their devotion to the single Marian statue, while based on ethnographic research at the oldest and largest Indo-Caribbean Hindu temple in South Florida, it has presented a heuristic and critical case for comparison with the earlier studies, which explore the South Asian communities in the traditional settlements such as New York.

研究分野：文化人類学・民俗学・社会学

キーワード：宗教 移民 ディアスポラ 共生 社会関係資本

1. 研究開始当初の背景

本課題は、それまで研究代表者が実施していた調査・研究の統合と批判的発展であり、それらは以下2つの相補的枠組みに整理できる。

宗教の人種化とナショナリズム

トリニダッド・トバゴ (以下、トリニダッド) は、植民地期の入植政策の結果、人種・エスニシティが社会的区分と階層化の主因となってきた。この点について、植民地期における最大の労働者階級集団を成し、1962年に独立したトリニダッドの中で最大の民族集団となったアフリカ系と南アジア系移民及びディアスポラの関係の関係がとりわけ重要である。19世紀に英領として割譲されたトリニダッドでは、砂糖プランテーション開発が奴隷解放の時期と重なり、常に深刻な労働力不足が問題となった。その対策として、現在のインドを中心に広く南アジアから契約労働者が導入された。南アジアからの入植は、それまでトリニダッドの社会階層を規定してきた「人種」の再解釈をもたらした。肌の色をはじめ遺伝表現の特徴では他者化できない南アジア系移民を支配的に包摂する言説として、ヒンドゥー教など彼ら非キリスト教的世界観や宗教実践が「人種化」された。植民地期に南アジア系移民を他者化し、排除および支配的に包摂してきた人種と宗教の接合言説 (articulated discourse) (Aisha Khan, *Callaloo Nation*, 2004) は、トリニダッドが脱植民地化と政治独立のプロセスを進む中で、政治動員を伴いながら、アフリカ系 (Afro-Trinidadians) と南アジア系住民 (Indo-Trinidadians) を差別化し、対立させてきた。一方でトリニダッドは、同じく多入種・多文化・多宗教を特徴とする旧植民地社会と異なり、これら集団間の対立が暴力的な社会分裂をもたらすことなく、これまで比較的安定した政治・経済発展を遂げてきた。博士論文 *Hyphenated Cultures: Ethnicity and Nation in Trinidad* (Florida International University, 2006) とその後に発表してきた論文では、民族誌と歴史分析を相互に補完しながら、特に宗教間の関係に着目して、トリニダッドの社会を特徴づけてきた人種・エスニシティによる社会区分・階層と社会統合の関係を人類学的に考察した。

移民の宗教と社会関係資本

2001~2002年にフロリダ国際大学移民・エスニシティ研究所が実施した共同研究「宗教・移民・市民参加 (Religion, Immigration, and Civic Engagement)」は、米国フロリダ州南部 Miami Metropolitan Area (Miami-Dade 郡と Broward 郡) に居住するラテン・アメリカおよびカリブ地域からの移民とアフリカ系アメリカ人の宗教が彼らの社会関係資本 (Social Capital) 形成と市民としてのコミュニティへの関与 (Civic Engagement) に与える影響について調査した。この共同研究に参加し、英語圏カリブ諸国に出自を持つ移民 (West Indian Americans) を信者として多く抱える教会、特にジャマイカまたトリニダッドからの移民が、それぞれ集中するペンテコステ派キリスト教会とカトリック教会において、2年間の参与観察と聞き取り調査を実施した。その結果、(1) ペンテコステ派のジャマイカ移民は、社会資本の形成が信条・教義を共有する教会に限定される傾向にあり、他の宗派

やエスニック集団との関係が希薄である (これは、アフリカ系アメリカ人の教会や、他の宗派に属する West Indian Americans と比較した場合あきらかである)、(2) ペンテコステ派ジャマイカ人教会では、他の宗派に比べて、女性と若年・青年層の活動が活発で、彼らの活動を通じて宗派を超えた社会資本形成の「萌芽」が見られ、将来に孤立を軽減するネットワーク形成の可能性が見られる、(3) トリニダッドからの移民の多くは、カトリック教徒であり、出身国や人種・エスニシティだけではなく、宗教や宗派を超え、これらの分節を架橋する社会関係資本の形成と市民活動への参加が積極的に行われている、などが明らかとなった。ジャマイカおよびトリニダッドからの移民の同化については、同じく West Indian American という1つの枠組みの中で分析される傾向にあるが、彼らの宗教教義が彼らの社会関係資本や市民活動への参加に与える影響という観点から考えると、同化のプロセスに大きな違いがあることが明らかになった。これらの結果と議論についての論文は、Alex Stepick, Sarah Mahler, & Terry Rey (eds.), *Charity and Churches in the Immigrant City: Immigration, Religion and Civic Engagement in Miami* (Rutgers University Press, 2009) に所収されている。

2. 研究の目的

本課題は、トリニダッドおよび南フロリダの南アジア系移民・ディアスポラを対象として、(1) 宗教が受入社会における移民のアイデンティティ、「コミュニティ」の形成に如何なる影響を与えているか、(2) 宗教「伝統」の再構築と展開が多文化・多入種・多宗教を特徴とする受入社会において、彼らと他集団との共生、ひいては、その社会の統合と安定に如何なる影響を及ぼしているか、について民族誌的手法を用いてデータを収集して考察し、宗教と社会に関する既存の概念や理論的枠組の再検討に寄与することを目指して実施した。

3. 研究の方法

質的研究である本課題では、トリニダッドおよび南フロリダにおける参与観察、聞き取り調査 (半構造個人インタビューおよびフォーカス・グループ) によって収集したフィールド・データを、古文書・史料調査によって文脈化・歴史化しながら分析し、論文と学会を通して、その結果の発表と共有に努めた。

トリニダッド

19世紀半ばからトリニダッドに入植を始めた南アジアからの移民は、自らの宗教伝統であるヒンドゥー教を再構築する過程で、トリニダッド島南部の町 Siparia のカトリック教会に安置された黒い肌のマリア像 *La Divina Pastora* にヒンドゥー女神の姿と力を投影させて信仰を始めた。今日、毎年イースター前の聖金曜日にヒンドゥー教徒が、イースターから3週間後の日曜日 (The Fourth Easter Sunday あるいは Good Shepherd Sunday) にカトリック教徒がそれぞれ巡礼することで同一像の共有信仰が成り立っており、信仰している宗教にかかわらず、この像には彼らが抱えるあらゆる問題 (“sickness”) を治癒する力が宿っていると信じる。



La Divina Pastora

19世紀から現在に至るまで政治・知識エリート層を主体とする文化政治の文脈で繰り返される宗教伝統間の対立がありながら、ヒンドゥー教徒とカトリック教徒による同一マリア像の共(分)有信仰がなぜ、如何にして成立・再生産されてきたか。これを中心の問いとして、2012~2014年の3年間、毎年イースター前後の3週間~1ヵ月間、(1)ヒンドゥー教徒とカトリック教会による巡礼を教会による巡礼の準備と切上げ作業を含めて参与観察、(2)教会関係者(司祭、祭壇奉仕者、像の世話をする女性など)・巡礼者・他宗教・宗派指導者への聞き取り調査、(3)Archbishop House Chancery and Archives(大司教区古文書館)、National Archives of Trinidad and Tobago(国立古文書館)、University of the West Indies, Alma Jordan Library, West Indiana Collection(西インド諸島大学図書館)での古文書・史料調査を実施した。

南フロリダ

南アジアの文化的出自を持つカリブ地域からの移民(Indo-Caribbean)が、移住先である南フロリダの新しい文脈において、彼らの宗教をどのように再構築し、宗教を軸に、どのような社会関係資本を形成しているか。北米における南アジア系移民の宗教については、既に多くの調査がなされ、成果が発表されている。しかし、本研究がフィールドとする南フロリダは、これまで調査が集中して行われてきた米国東海岸および西海岸の都市とは異なる。南フロリダに最初に移住した南アジア系移民はIndo-Caribbeanであり、1980年代初頭から現在まで彼らが南アジア系移民の中で多数派を形成している。南フロリダにおける南アジア系移民の宗教と社会関係資本に関する調査の結果は、これまでより伝統的な移住地をフィールドとして研究成果を批判的に相対化する重要な事例となる。本研究は、2012年に行った予備調査の結果に基づき、Broward郡南部、Oakland Park市にあるシヴァ寺院(3000 NW 29th Avenue, Oakland Park, Florida, 33311)において参与観察と指導者ならびに信者への聞き取り調査を行うこととした。なぜなら、同寺院を運営するフロリダ・ヒンドゥー協会(Florida Hindu Organization)が1984年にトリニダッドとガイアナ出身の移民が中心となって設立したフロリダで最初のヒンドゥー教宗教団体(Faith-based Organization)であり、現在の指導者と信者も、数名のインド出身移民を除き、そのほとんどがトリニダッドおよびガイアナからの移民だからである。

具体的には、2012年2月末~3月初旬にMaha Shiv Raatri(シヴァ神祝祭儀礼)、2014年9月末~10月初旬にNavaatri(Durga神祝祭儀礼)での参与観察と宗教指導者および参列者への聞き取り調査を実施した。



FHO Shiva Mandir

4. 研究成果

トリニダッド

先行研究では、この共/分有信仰が英国による植民地支配の下で発展したことから、像が帰属する覇権的カトリック教会とそれに帰依するヒンドゥー教徒の間の文化政治に着目し、人種と宗教の接合言説が如何にヒンドゥー教・教徒を他文化・他宗教・他集団から排除してきたかを示す重要な事例として提示してきた(例えば、Viranjini Munasinghe, *Callaloo or Tossed Salad? East Indians and the Cultural Politics of Identity in Trinidad*)。しかし、本研究の長期にわたる参与観察と聞き取り調査、詳細な古文書調査の結果、より複雑で矛盾した集団間の関係が明らかとなり、むしろその複雑さと矛盾ゆえに、トリニダッドにおいて、このマリア像がカトリック教徒だけではなく、ヒンドゥー教徒にとって最古で最大の巡礼地を形成してきたこと実証した。

(1)ヒンドゥー教徒による強い帰依と、このマリア像を介した神への贈与は、19世紀後半、植民政府による英国国教会への加担によってもたらされた財政的困難とヒンドゥー教徒への布教を拡大しようとしていたむしろカトリック教会の内部に、この像を巡る紛争を引き起こした。歴史的にこの像の力によって教会を維持してきたSipariaのカトリック教徒にとって、像への関与を強める大司教区は、自らの信仰と生活を脅かす存在であった。ヒンドゥー教徒をSipariaの教会から排除し、像をヒンドゥー教徒への布教活動に差し出すよう迫る大司教区に対して、Sipariaのカトリック教徒は、カトリック教徒とヒンドゥー教徒が巡礼する日を分けるとともに、それぞれが巡礼する際にLa Divina Pastoraの配置を変えることで、大司教区に対して、カトリック教徒による信仰は、異端であるヒンドゥー教と関わりがなく、真正であること、そして自分たちが正統な像の管理者(custodian)であることを主張した。時間的・空間的に像を移動させることでカトリック教徒がその力を信じるLa Divina Pastoraの真正性を主張することは、ヒンドゥー教徒の信仰と実践からズレを創り出したが、同時にヒンドゥー教徒が同じ像に投影する女神とLa

Divina Pastora とを対照的であり、相互に不可欠な存在として結びつけてきた。ヒンドゥー教徒がこの像をヒンドゥーの女神として帰依すればするほど、像のもう一つのアイデンティティである *La Divina Pastora* の真正性が確認、再生産されるメカニズムが作られた。ヒンドゥー教徒とカトリック教徒の意図していない協働によって、この像とその治癒力に強い「場所性(placeness)」と「変質力(transmutability)」を賦与し、マリア像をヒンドゥー教徒が考える神像(murti)に近づけた。これらの点をまとめた論文 “Sharing Mothers: Social and Political Life of La Divin in Trinidad”を学術雑誌 *The Journal of Latin American and Caribbean Anthropology* に既に寄稿済みで、現在査読を受けている。

(2) 一つのマリア像を時間的・空間的に移動させることでヒンドゥー教徒の世界観や儀礼の影響から *La Divina Pastora* とカトリック教徒による像の信仰の真正性を維持してきた。しかし、時間的・空間的境界を往来する同一像が、助けを求める者の宗教アイデンティティに合わせて、自らのアイデンティティを変化させるため、像の世話をする女性は毎年新しい服を用意し、儀礼的な着替えを行ってきた。19世紀から続く、女性による像の儀礼的着替えは、大司教区からヒンドゥー教徒を排除するようにとの要求が強まるとともに、その頻度と強度を増してきた。また、*La Divina Pastora* の力の源である処女性を守るために、限られた女性信者が行う儀礼的着替えは、司祭を含めすべての男性を排除して、秘密裏に行われてきた。結果として、像には恥じらいを持った生身の女性としてのアイデンティティが賦与され、信仰を問わず、男性の好奇心目と性的放蕩の対象になっているという言説を生み出してきた。この言説は、男性が支配するカトリック教会にあって、像の可視性(visibility)と可触性(tangibility)を形成する服のデザインと作製、着替えという重要な側面を女性の影響力の下に留める結果を生み出した。これらの研究結果については、2014年アメリカ人類学会総会(12月3~7日)ならびに西インド諸島大学ジェンダー・開発学研究所(Institute for Gender and Development Studies)主催のセミナー(2015年1月28日)において発表した。また、発表の際に受けたコメントを参照しつつ、現在、論文 “Dressing the Statue: Spirituality and Sexuality of the Blessed Virgin as “Indian Lady””を草稿中であり、2015年12月までに学術雑誌 *Material Religion* に投稿予定である。

(3) 19世紀後半から20世紀初頭にかけて、大司教区を中心にカトリック教会のエリート層は、ヒンドゥー教徒の巡礼を廃止するよう Siparia のカトリック教徒に強く要求しつつ、一方で、ヒンドゥー教徒の改宗をもたらす重要な媒体として、この像を活用しようとした。この矛盾によって、カトリック教会のエリート層が意図した宗教間の境界の管理は失敗し、むしろ *La Divina Pastora* の治癒力について広くヒンドゥー教徒の間に浸透させる結果となった。その後、*La Divina Pastora* によるヒンドゥー教徒の改宗をあきらめたカトリック教会のエリート層は、すでに異教徒による境界侵犯によって「汚された」*La Divina Pastora* を凌駕して新たな巡礼地を形成できるマリア像の振興に努め

てきた。これらの議論については、現在、論文 “Circulation of Marian Images in Catholic ‘Coolie Mission’: Contradictions in Ruling the Boundaries of Religion in Trinidad”を執筆中であり、2015年12月までに学術雑誌 *Journal of Religious Studies* に投稿予定である。

南フロリダ

「研究開始当初の背景」に上述したように、フロリダ国際大学移民・エスニシティ研究所の共同研究では、英語圏カリブ諸国からの移民のうち、キリスト教徒のみを対象として調査を行い、同じキリスト教徒であっても宗派・教義の違いが移民の受入社会における社会関係資本形成にどのような影響を与えているかを明らかにした。本研究では、南アジアの文化的出自を有する英語圏カリブ諸国からの移民を対象として、彼らの信仰が帰属意識やトランスナショナリティなど、南フロリダでの社会関係資本の形成に影響がある様態にどのように影響しているかについて調査を実施した。トリニダッドと異なり、南フロリダの事例研究については、調査の継続が必要であるが、既に本研究課題における調査から以下の点が明らかとなった。

(1) 調査対象であるヒンドゥー寺院は、寺院に帰属する人々の中の社会関係資本を強化しているが(bonding)、多くのキリスト教教会が実施するコミュニティへの奉仕・市民活動、例えば、Food Bank や Soup Kitchen など是一切行っておらず、その結果、宗教や宗派を越える社会関係資本の形成(bridging)はもたらしていない。これには、南アジア系カリブ移民がアフリカ系カリブ移民に比べて、より広い範囲に分散して居住しており、あくまでも niche” institution であり、“neighborhood” institution (Helen Rose Ebaugh, Jennifer O’Brien and Janet Slatzman Chafetz, “The Social Ecology of Residential Pattern and Memberships in Immigrant Churches.” 2002) としての役割は担っていない。

(2) 指導者によれば、Indo-Caribbean と Asian Indian のヒンドゥー教の間には、教義的、実践的に大きな違いは見られない。Asian Indian は、Indo-Caribbean のヒンドゥー教を「非正統(unauthentic)」であると見る者が多く、これに対して Indo-Caribbean は、典型的に “We are more Indian than Indians” と表現して、南アジアのヒンドゥー教徒が失ってしまった authentic なヒンドゥー教を守り続けてきたという強い自負を持っている。ニューヨークなど伝統的な移住先のように、歴史的に Asian Indian が「インド人」の大多数を占め、マイノリティの Indo-Caribbean を次第に同化してきたのと異なり、南フロリダでは、その異なる文脈によって、ヒンドゥー教が “Pan-Indian” などより広い民族意識の形成をむしろ妨げている。Indo-Caribbean は、Asian Indian に対して、自らの “West Indianness” を強調することで「インド人」としての正統性を主張している。しかし、今後もアフリカ系カリブ移民(特にジャマイカからの移民)が増加し続けた場合、Indo-Caribbean が Asian Indian との間により強い関係を形成して、脱アイデンティティを防いでいくことも考えられる。

(3) 同寺院において社会関係資本が bonding に特化している重要な原因は、さらに信者が示す強い

トランスナショナリティである。キリスト教徒と異なり、ヒンドゥー教徒の場合、移住後、寺院を選択する際に、移住前から続く宗教指導者との個人的、家族的なつながりを重視する傾向が強い。同寺院の指導者 Pundit Bimal Maharaj は南フロリダに移住して 20 年以上になるが、トリニダード国内にも寺院を所有・運営している。この指導者は、3 週間～1 カ月単位でトリニダードと南フロリダを往復して、二つの場所で Puja や冠婚葬祭を執り行っている。この指導者との個人的な強い結びつきは、彼を介した信者とトリニダードに居る彼らの家族との間の結びつきを常に強化し続けている。

なお、トリニダードおよび南フロリダでの具体的な事例研究の成果をまとめた論文や学会発表だけでなく、課題に関連する先行研究の検討の一つの成果として、書評論文(論文)および参照図書掲載の論考(図書 および)を出版した。

5. 主な発表論文等(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件 [うち 1 件は現在査読中])

Teruyuki Tsuji. “Sharing Mothers: Social and Political Life of the Statue of La Divin in Trinidad.” *The Journal of Latin American and Caribbean Anthropology*. [査読論文: 寄稿済・査読中]

Teruyuki Tsuji. “Cocoa, Catholicism, and Creoleness: Ethnicized Plantation Economy as a Matrix of Modern Trinidad.” *The Global South*, Special Issue of *Plantation Modernity*. [査読論文: 査読済・掲載決定・発行日未定]

Teruyuki Tsuji and Charles Thomas. “Introduction.” *Caribbean Review of Gender Studies*, Special Issue of *Gender and Spirituality*. [査読論文: 査読済・掲載決定・発行日未定]

Teruyuki Tsuji. “Glenda Tibe Bonifacio and Vivienne SM. Angeles, *Gender, Religion, and Migration: Pathways of Integration* (Lexington Books, 2010).” *Religion and Gender* 2 (1), 2012: 186–189. [査読書評論文]

〔学会発表〕(計 7 件)

Teruyuki Tsuji. Dressing the Statue: Spirituality, Sexuality, and Sociality of the Walking Statue. *IGDS Seminar*. Institute for Gender and Development Studies (IGDS), The University of the West Indies, St. Augustine, Trinidad. January 28, 2015.

Teruyuki Tsuji. “Dressing the Statue: Sociality and Sexuality of the Blessed Virgin/ ‘Indian Lady.’” *American Anthropological Association*. Washington, DC. December 3–7, 2014.

Teruyuki Tsuji. “Sharing Mothers: A Sociobiography of the Walking Statue.” *American Anthropological Association*.

Chicago, IL. November 11–18, 2013 [Poster Presentation].

Teruyuki Tsuji. “Sharing Mothers: Religious Conflict and Hyphenation.” *Society for the Anthropology of Religion* Biennial Meeting. April 11–14, 2013.

Teruyuki Tsuji. “A Theoretical Proposal on Cultural Mixing, (still) a ‘Miracle begging for analysis.’” International Conference, *Perspectives on Interculturality*. Saint Louis University. February 28–March 1, 2013

Teruyuki Tsuji. “Between ‘Indian’ and ‘West Indian’: Ethnoreligiosity and Social Capital Development of the Indo-Caribbean Migrants in South Florida.” *American Academy of Religion*. Session of Hinduism in North America, cosponsored by North American Religions, North American Asian Religions, Culture, and Society, North American Hinduism, and Religion and Migration Units Chicago, IL. November 17–20, 2012.

Teruyuki Tsuji. “Villaging the Nation: Eric Williams and Engineering of National Culture.” *Independence and After: Eric Williams and the Making of Trinidad and Tobago*. University of London, Center for the Study of the Americas. September 27, 2011.

〔図書〕(計 4 件 [うち 1 件は現在執筆中])

Teruyuki Tsuji. “Nomadic Gods: Mobilities, Migration, and Religious Pluralism.” *Gender/God Macmillan Interdisciplinary Handbook* (Section V: Landscape, Power, and Place), edited by Sian Hawthorne. Palgrave-Macmillan. [契約済・招待執筆・同研究課題成果に基づき現在執筆中・2016 年 5 月発行予定]

Teruyuki Tsuji. Teruyuki Tsuji. “Caribbean.” *The Wiley-Blackwell Encyclopedia of Race, Ethnicity, and Nationalism*, edited by J. Stone, R. Dennis, P. Rizova, A. D. Smith, and X. Hou. Hoboken, NJ: Wiley-Blackwell [査読済・掲載決定・2015 年 8 月発行予定].

Teruyuki Tsuji. “Toward the Materiality of Intercultural Dialogue, still a ‘Miracle begging for analysis.’” *Perspectives on Interculturality: The Construction of Meaning in Relationships of Difference*, edited by Michal Rozbicki, pp. 53–68. Palgrave-Macmillan, 2015.

Teruyuki Tsuji. “Trinidadian and Tobagonian Immigrants.” *Multicultural America: An Encyclopedia of the Newest Americans*, edited by Ronald H. Bayor, pp. 2135–2189. Westport, CT: ABC–CLIO/Greenwood Press, 2011.

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
特になし

6. 研究組織

研究代表者

辻輝之（TSUJI, Teruyuki）
国立民族学博物館民族社会研究部外来研究員
研究者番号：20546832